
アイリス

綾未玲 奏音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイリス

【Nコード】

N7945P

【作者名】

綾未玲 奏音

【あらすじ】

恋人を事故で亡くした少女、未菜。恋人を病気で亡くした少年、来輝。デートのドライブ中の事故がきっかけで話すことができなくなった恋人をもつ女性、英里菜。

それぞれの恋の行方を追っていく、少し切ない恋愛小説。

OPENING (前書き)

ゆらゆらブランコにほんの少し似てるかも……。

レポートリー少なくてすいません (><;)

冒頭部分だけ前に書いてたものなんで、最初の方とかけ離れた話にならないようにがんばります。よかったら見てください。

OPENING

想像してみてください。

あなたは、暗い暗い闇の中にいます。

手探りでしか、道は見つけられません。

唯一あなたを照らしていた光は、はかなく消えてしまいました。

一瞬で闇と化したあなたのまわりは、あなたから感情も表情も何もかも、うばってしまいます。

残されたのは、あなたと、漆黒の闇……。

音も光もない世界で、あなたは何を思いますか？

このお話は、そんな闇の中に一筋の光を見つけたことができた、ある少女たちの物語です。

暗闇（前書き）

連載どっちを中心に書こうか迷ってます……。
とりあえず、書いてある分は更新しました。

暗闇

ぶあつい雲が広がった、どんよりとした空。

わたしは、今にも雨が降り出しそうな窓の外を、ぼんやりと眺めていた。

授業をしている先生の声が聞こえなくなる。生徒のざわめきも、わたしの世界には入ってこられない。

そういえば、あの時もこんな天気だった

あの時、を思い出すたび、激しい後悔におそわれる。

あの日、あの時。

わたしがとめたら、きっと遥輝はあんな天気の中、わたしの家まで来なかっただろう。

わたしがとめたら、事故にもあわなかっただろう。

わたしがとめたら、まだ生きていただろう。

わたしがとめたら……こんなにづらい思いをしなくてすんだだろう。

わたしの彼氏、つひこの庄野 遥輝は、あの日トラックにはねられて、そのまま帰らぬ人となってしまった。

いくら後悔したって仕方がない。今さら遥輝がもどってくるわけではない。

でも、最後に聞いた遥輝の声と、最後に見た遥輝を思ったび、胸が苦しくなる。

連絡をうけて急いでかけつけた、事故現場。

遥輝は倒れていたが、しっかりと何かをにぎりしめていた。

それは、わたしに贈ってくれる予定だった、ネックレスだった。

あの日携帯にかかってきた、遥輝からの一本の電話。

え、今から来るの？

おう、渡したいものがあるんだよ。

それはうれしいけど……もうすぐ雨が降るんだよ。危ないよ？

わかってる。もう降り出しそうだから、走っていくよ。
でも……。

大丈夫、それよりプレゼント、楽しみにしてるよ！

……わかったわ、気を付けてね。

じゃあな。

最後の言葉。これが、本当のさよならになってしまったんだ。

白色のアイリスという花がついた、きゃしゃなネックレス。

遥輝がくれるはずだった贈り物は、遥輝の唯一の形見になってしまった。

首筋にかけてあるネックレスを、そつと手に取って見つめた。

「遥輝……。」

あふれ出しそうな涙をこらえて、わたしはもどってきた。

真つ暗闇な、現実……。

帰り道。

案の定雨が降ってきたので、傘をさして帰っていた。

だんだんと雨は激しさを増し、横なぐりの雨になってきてしまった。
わたしは前の方に傘を倒し、バッグを傘に隠すようにして歩いていた。

そんな風に前をほとんど見ずに足元ばかり見ていたので、わたしはぶつかるまで、前に人が立っているのに気がつかなかった。

「あつ、ごめんなさい。」

あわてて傘をあげると、冷たい雨が入ってきた。前に立っている人の顔は、よく見えない。わたしはもう一度傘を前倒しにし、歩き出そうとした。

「……アイリス。」

その人の横を通り過ぎようとした時、はつきりとしたつぶやきが聞こえた。

「踏みそうだよ？」

今度はわたしに向かって言ってきた。わたしは雨が入らないように

少し傘を上げて辺りを見回し、ようやくここが遥輝の事故現場だと気づいた。

「まさか、忘れていたの？ 遥輝のこと。」

今、言った。はつきり、「遥輝」と。

かさかさと音を立てるアイリスから足をどけ、

「あなたは……？」

もう雨にかまわず前を向くと、そこには一人の少年が立っていた。こんな大雨の中、傘もささずに。

おそらく同じ年ぐらいなのに、なぜかその人はすごく幼く見えた。まるで、小さな幼児のまま、体だけ大きくなったみたいに。

「僕は、庄野 来輝。しゅうの みき 君は？」

話し方も子供みたいだった。しかし、その瞳だけは何かが違った。深い深い、悲しみの色だった。

それはまるでわたしが住んでいる、闇のよう。

「時雨 未菜。しぐれ みな」

わたしはきっぱりと答えた。その答えを聞いて、来輝が笑う。

「なんか、君っておもしろいね。」

「何が？」

雨が、ざあざあとアスファルトに落ちてはねかえり、その音が反響して聞こえる。しかし、わたし達の声はお互い、スピーカーを通しているかのようにはつきりと耳元で聞こえてきた。

「遥輝が事故にあった場所にも気づかないで、アイリスを踏みそうになるなんて。そんなに悩んでいるのかと思いきや、問いかけに対する答えはきっぱり。」

「……？」

何を言われているのかわからない私をおいて、来輝はなおも続けた。「遥輝はここで事故にあったんだよね。君へのプレゼント、アイリスが付いたネックレスをにぎりしめて。」

「ねえ。」

わたしはあまりにも知りすぎている来輝がこわくなった。首筋でし

やらりと例のネックレスが音をたてる。

「来輝は、いったい何を知っているの？」

わたしの問いかけに、来輝は悲しい色の瞳をしばらくしばたたかせていたが、やがてふつと笑った。

「僕は、なんでもわかつちやうんだよ。特に、君と遥輝の事は。」

その時の来輝の表情は、遥輝にそっくりだった。

わたしは、空間や時間がゆがんだのではないかと一瞬錯覚した。

来輝は、遥輝とわたしの、なんなのだろう？

そんなわたしの思いをよそに、来輝はわたしの背中を軽く押した。

「もう僕の事はいいから。雨もひどくなってきたし、帰った方がいいよ。」

「来輝……。」

「またきつと、ここで会えると思うから。」

来輝はそう言つて、静かにほほ笑んだ。

そのほほ笑みは、遥輝がわたしの心を落ち着かせるときの表情に似ていた。

わたしは足元で雨と風にうたれてゆれるアイリスを見つめながら、

遥輝の事故現場をあとにした。

来輝の視線を感じなくなった時に振り返ると、来輝がとても悲しそうな姿で、空気にとけてしまいそうにして立っていた。

わたしは何か見てはいけないものを見たような気になって、目をそらした。

不思議な出会い

なんだか今日は変な一日だった……。

ぬれた制服を乾かして、お風呂につかりながら、わたしはさっきの来輝の事を考えていた。

来輝はなんで、わたしと遥輝の関係を知っていたのだろうか。

というか、そもそもあいつは何者なのだろうか。

わたしは最後に見た、悲しそうな来輝の表情を思い浮かべた。

「何があつたのかな。」

ほんの数分の出来事だったはずなのに、それはお風呂で熱くなったわたしの頭の中でぐるぐるとうずまき、わたしは結局一時間以上も考え込んでいた。

「ただいま。」

妹の声が出た。わたしは大きな声で「お帰り」と玄関に向かって言った。

「お姉ちゃん、お風呂？」

わたしの一つ下の妹　時雨^{しぐれ}　結菜^{ゆな}　が、風呂場のドアをノックした。

「入っていいよ。」

わたしは湯船から出て、風呂場にかけてあったバスタオルを体に巻き、ドアを開けた。

「うわ、お姉ちゃん顔真っ赤だよ！」

結菜は、ぼーっとしたわたしをお風呂場から出してマットに座らせ、わたしの着替え一式を持ってきて、渡してきた。

「ほら、着替えてよ。」

わたしはその言葉に反応し、動こうとしたところで体がふらついた。シャツを着て、ズボンをはいて、すべての着替えを終わらせたところで、まわりの景色がぐるりとまわった。

「あれ？」

「お姉ちゃん!？」

結菜の声が遠くなって、わたしは気をうしなった……。

気が付くと、天井が見えた。

横には除湿機が置いてあり、わたしの頭には濡れたタオル。

結菜がそのままソファーに寝かせてくれたらしく、わたしはぬれて
いた髪がパイナップルのようにはねていた以外、倒れる前となら
変わりがなかった。

となりでは結菜が声も出さずに、きのう録画した今はやりのドラマ
を見ている。

「結菜……?」

「あ、お姉ちゃん起きた。」

結菜はリモコンを取って、一時停止ボタンをぽちつと押す。

「わたし、のぼせた?」

「うーん……。」

わたしが聞くと、結菜は急に難しい顔をした。

「な、なに?」

わたしはただならぬその気配に、思わず声をひそめた。

「もしかしたら……もっと重い病気かも……。」

「えっ!?!」

わたしは結菜の顔をもう一度見た。

「うそ……でしょ?」

「……わからないけど、そっくりなの。わたしが前、本で見た病
気に。急に倒れたり、ふらふらしたりとか。さっき眠つてるときは熱
が上がったり下がったりしてたし。」

「そんな……。」

わたしは力が抜けた。へなへなとその場に座り込むわたしを、結菜
はしばらくうつるんだ目で見ていた。が、やがてぷつとふき出した。

「うそだよ。」

「はい?」

おどろきすぎて変な声になってしまった……。

わたしはさらに笑い転げる結菜の肩をつかんだ。

「ひどいじゃない！ 本気にしちゃったよ！」

「真に受けちゃったね、お姉ちゃん！」

言われたわたしは、結菜を見て少し照れて笑った。

「よかった……お姉ちゃん笑った。」

すると結菜が肩をゆすぶられながら、つぶやいた。

わたしは手をとめて、結菜を見る。

「久しぶりに笑ってくれた。よかった！」

結菜は心からうれしそうにほほ笑んだ。

「今日ね、ピアノの帰りにシュークリーム買ってきたんだ！ 一緒に食べよう？」

「うん！」

わたしはそう返事できると、髪をなおすために洗面所へ向かった。

結菜は、わたしの気持ちを一番よくわかってくれている。

年子だから小さい頃はよくけんかもしたが、幼いように見えて、実はしっかり者の結菜に、わたしは憧れをもっていた。

そして、結菜の一番いいところは、気をつかえるところだと思う。

結菜には、つい最近同級生の彼氏ができた。わたしはとづくに知っていたが、結菜はわたしと遥輝の事を知っているため、彼氏がいるってことを、決して言わない。

わたしだって、妹と恋バナができたらどんなに楽しいだろうなって考えたりもする。

でも、遥輝を失ったばかりのわたしにとって、恋愛の話はつらすぎる。

「お姉ちゃん、手伝って。シュークリーム食べるんでしょ？」

リビングに戻ると、結菜はいちはやく冷蔵庫を開け、シュークリームを二つ、お皿にのせていた。

「あ……ごめんごめん。今行くね。」

わたしはお湯をわかし、ティーバックときゅうすと砂糖、それにミ

ルクとレモンを運んだ。

「じゃあ、いただきます!」

席について、二人でシュークリームを食べ始めた。

「おいしい!」

ほっぺに粉砂糖をつけた結菜が、幸せそうに笑った。

わたしは思い切って言ってみた。

「そういえばね、今日、遥輝の事故現場行ってみたの。」

「へえ……。」

結菜はとたんに口をとぎした。余計なことはいうまいとしているのか、さつきよりシュークリームを食べるスピードがはやい。

ちようどお湯がわいたので、わたしは席をたって、カップにお湯をついだ。

「そうしたらね……遥輝にそっくりな、男の子に会ったの。不思議でしょう?」

「そうだね。」

口数がさつきより減っている。わたしは一つのカップを結菜の方へ置き、もうひとつのカップにティーバックを入れたり出したりして、濃さを調節した。

できた紅茶にミルクを入れ、かき混ぜながら話を続ける。

「世の中、不思議なこともあるもんだね。」

結菜が小さな声で言って、ティーバックとレモンをつかむ。レモンティーをつくって一口飲むと、結菜はにっこりした。

「じゃあ、わたしちょっと勉強してくるね。」

一応受験生の結菜は、毎日目標を決めて勉強している。

結菜が二階にあがったあとは、静かな部屋にしとしと降り続ける雨の音だけがひびいていた。

不思議な出会い（後書き）

いそがしくて更新スピードがガタ落ちです……。文章もつまく書けないし、つながりがないし、わたしは一つの章を一気に書かないと忘れるタイプだということが判明しました。

二人目の出会い（前書き）

アイリス書くの、久しぶりです。

二人目の出会い

翌日の朝　　。

来輝に会えると思うと、なぜだか胸がはずんだ。

わたしは、いつもならのろのろと起きているはずの時間に家を出て、あの場所へ向かった。

不思議だ。まるで、何かに操られているかのように、自然と足が動く。

そしてあの場所についた　　。

よく目をこらすと、誰かが立っていたが、来輝じゃない。

スカートを着ているし、（最近では、スカートをはく男の子もいるけど）髪はロングだし。多分女性だろう。

でも、あの雰囲気……。

（来輝に似てる……）

わたしはどきんとして、その女性に近づいて行った。

もしかしたら、来輝の親戚か何かかもしれない。

「あのう……。」

意を決して声をかけると、その女性はぱつとふりむいた。

「あ……ミナちゃんだ。」

「えっ!？」

いきなり名前を言い当てられ、おどろいてかたまってしまった。

（まさか、怪しい人じゃないよね……？）

距離をはかるように退くと、女性は手をひらひらさせながら、あやまってきた。

「ごめんごめん。ミナちゃんは、わたしの事知らないものね。びっくりさせちゃったね。」

「あなた……誰ですか？」

わたしの問いに対して、

「人の名前を聞くときは、まず自分から名乗りなさい。」

いたずらっぽく笑う女性を前に、わたしは言い返した。

「だって、わたしの名前、知ってるんでしょ？」

女性は一瞬動きをとめてから、また笑った。

その笑い方は、なんだかひどく幼く見えた。わたしと同年ぐらいか、それより少し年上ぐらいに。

「わたし、あなたの下の名前が「ミナ」ってことしか知らないもの。名字も、どんな字を書くかもわからない。」

話しているうちに、ふいに、女性とはまどいにあふれた表情になった。わたしはその隙について、質問をする。

「どういう経緯で、わたしの名前を知ったの？ まさか、昨日のわたしと来輝の会話を盗み聞きしたとか？」

「……少しだけ当たっているわ。」

女性はまだとまどいを残したまま、答える。

「どこが当たってる？」

「盗み聞きつてところ。」

わたしはびっくりした。自分で考えた選択肢なのに、女性が盗み聞きをしていたとは、思わなかったのだ。

「でも、きのうミナちゃんがここにいたなんて、わたしは知らない。わたしが名前を聞いたのは、病院で、よ。」

「病院……？」

確かに、病院で診察室に呼ばれるときに、「時雨未菜さん！」とは呼ばれるけど、それなら名字も知っていていいはずじゃない？

疑問を残して首をかしげるわたしに、女性は言いにくそうにして答えた。

「ミナちゃんの診察じゃないわ。ミナちゃんの大切な人が、救急車で運ばれてきた時に、『ミナちゃん、落ち着いて！』って、みんなに言われていたのを聞いたの。」

「……それって……！」

わたしは声が出なかった。女性は、わたしに衝撃的な一言を告げた。「そう……ハルキ君が、ここで事故に遭った日。わたしは病院で、

「ハルキ」と「ミナ」っていう、二つの名前を知ったんだ。」

二人の秘密

しばらくの静寂のあと、わたしは自己紹介をした。

「……時雨未菜です。未来の未に、菜っぱの菜で、未菜。」

「奇遇ね。わたしの名前も、菜っぱの菜が入ってるわ。」

そう言つて、女性はふふつと笑つた。優しげな、しかしどこか悲しげなほほえみ。

「わたしは、谷川英里菜。字は、これ。」

女性が出したのは、一枚の名刺だった。

会社の名前などと一緒に、「谷川 英里菜」と書かれている。

「じゃあ、わたしはこれで。末菜ちゃん、学校に遅れないようにね。」

言われて腕時計を見ると、いつも家を出ている時間を少し過ぎていた。

「はい。では失礼します。」

英里菜さんに頭を下げると、わたしは学校への道を向かった。

? ? ? ? ? ? ? ? ? ?
 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?
 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

「あら、来輝君じゃないの。」

「英里菜さん、お久しぶりです。」

末菜が見えなくなった頃、入れ替わるように来輝が現れた。

英里菜は、なつかしくなつて目を細める。

「あの時は、お世話になりました。」

「いいえ。わたしも、妹がずいぶん迷惑をかけてしまって。」

「迷惑なんて……そんな。いけないのは、僕だっただですよ。英里^{えり}に、ずいぶん負担をかけたから。」

来輝の話を聞くと、英里菜はしばらく目をふせ、それからゆっくり首を横に振った。

「……その話は、もうやめましょう。来輝君だって、いい思い出じゃないでしょう?」

今度は来輝が、英里菜の顔を見ないようにしてうつむく。ちらりとそれを見ると、英里菜は話を変えた。

「来菜ちゃんは……?」

来輝が少し顔を上げて答える。

「いえ……気づいていないようです。戸惑っている部分はあるようですが。」

「そう……。」

英里菜は小刻みにうなずくと、来輝の顔をのぞきこむようにして聞いた。

「今は、来輝君よね?」

その不思議な質問に対し、

「そうですよ。」

来輝はにこやかに笑った。

来輝の事情

朝早く家を出たのが幸いしたのか、遅刻にはならなかった。

窓際の自分の席に着くと、友達が話しかけてきた。

「おはよう、未菜。」

「あ、おはよう。」

いつもなら挨拶だけの会話だったが、今日は友達の反応が違った。

「未菜……なんか前よりも明るいね。」

「そう?」

「うん。彼氏と別れてから、何となく暗い感じだったのが、なくなってる。」

そう言われても、無言でいるしかない。

この学校に、遥輝の事を知る人はいない。だから、遥輝が亡くなった時も、友達に「彼氏が事故で……。」なんていう話は一切しなかった。

そのため、わたしは彼氏と別れた、という設定になっている。

未だに、遥輝を失った心の傷は消えない。でも来輝や英里菜さんに会って、少し気分が変わった。

だから明るくなったというのは、二人のおかげ。

「ありがとう、来輝、英里菜さん。」

小声でつぶやくと、

「え、なんか言った?」

げんな顔をする友達。

わたしは何も言わずに、目をそっと閉じて首を横にふった。

すべての授業が終わり、習い事や部活に行きだす友達。

でもあいにく、わたしは部活に入っていない。習い事のピアノも、今日はない。

校庭で走り回るサッカー部を横目で見ながら、わたしは来輝や英里

菜さんに会いに行った。

校門をぬけて走るが、昨日の雨のせいで、ところどころ水たまりができていて、靴下に泥がはねる。

「あ、未菜……。」

息があがってしまったわたしを、来輝が見つ付けてくれた。

「どうしたの、そんなに走って。まさか、俺に会いたかった？」

「そんなわけないでしょ……って、俺？」

来輝の言葉に、びっくりする。

確か、来輝は自分の事、「僕」って言っていたはずなのに。
すると来輝が、はっとしたように目をふせる。

「それに、なんかその言い方、遥輝そっくり……。」「

「未菜。」

さらにふくらむ考えを、来輝が遮った。

「ちよつと、かつこつけてみただけだよ。あははっ、似合わないか。」

納得のいかないわたしに、来輝がごまかすように笑う。

「もういいじゃん、そのことは。」

そうまで言われてしまつては食い下がれない。

わたしはしぶしぶ問い詰めるのをやめた。代わりに、話を変える。

「ねえ、来輝は、谷川英里菜さんって知ってる？」

「知ってるに決まつてるじゃん。」

来輝は、にかつと笑う。けれどその表情が、一瞬さみしく曇った気がした。

「何で？」

「毎朝、会ってるから。」

「えっ、毎朝……ってことは、今日も会った？」

「ああ。いろいろ話したよ。」

それからわたしは、英里菜さんの話をしているうちに、ふとわいた疑問を口にした。

「来輝、そういえば学校は？」

「ああ……学校ね。」

さっきの笑顔とは一変、来輝は、吐き捨てるように言った。
「もう、行ってない。」

その言葉に、はっとわたしは口をおさえた。

「……余計な事言っちゃって……。」

「いいよ、気にしないで。普通の質問だと思うし。」

「……ごめん。」

「もういいって。」

心の傷に触れてしまったような気がして、わたしはこれ以上会話を続けることができなかった。

「……今日は帰るね、ごめん。」

「僕も、不快にさせちゃって悪かった……また明日。」

「うん。」

やっぱりどこか遥輝に似ている来輝を振り返りながら、わたしは家に帰った。

来輝の事情（後書き）

なんか、アイリスは書き出すと想像（妄想）がとまらないです。
でも、それがまとまった文章かと聞かれると、答えられない……。

英里菜のほほ笑み

それから何日かたった、ある日。

今日は休みの日だったが、朝早くに家を出て散歩してみると、あの場所に英里菜さんがいた。

毎朝英里菜さんに会っていると saying いた来輝の姿は、見当たらない。

「英里菜さん……。」

声をかけると、英里菜さんが振り返って大人のほほえみ。

「おはよう、未菜ちゃん。」

「おはようございます。あの、来輝は……？」

「来輝君？ ああ、この時間はまだ来ないわよ。未菜ちゃんが出るのと入れ違いぐらいだから、朝会うのは難しいかもね。」

自然と、安心のため息が出る。

わたしが、来輝の事に触れすぎちゃったから、もしかしたらもうここには来ないのかと思った。

「どうしたの、未菜ちゃん。」

英里菜さんが聞いてくる。わたしはふわあーと大きく息をはいて、答えた。

「昨日、わたし来輝の事、傷つけちゃったみたいだったから……もう、ここには来ないのかと思って、不安だったんです。」

「傷つけた？」

「はい、いろいろ来輝の事に首突っ込んだじゃって……。」

英里菜さんが、優しく、でもはっきりと言う。

「大丈夫よ。来輝君は、今日も来る。何があっても、来ないはずはないわ。」

「……どういうことですか？」

二つの大きな瞳が、わたしをのぞく。

「未菜ちゃん、来輝君を見て、何か気づいたことはない？」

「気づいたこと、ですか？」

聞き返すと、英里菜さんがうなずく。

「そう。未菜ちゃんは頭よさそうだし、何か気づくでしょう？」
いたずらっこのような、かわいらしい笑顔。

あやうく、英里菜さんが大人だということを、忘れてしまうような
「来輝は……遥輝にそっくりです。仕草とか、もののいい方とか……。それに、昨日は様子が変わりました。」

「変わって？」

きつと、英里菜さんにはわかっているはずなのに、教えてくれない。
「自分の事を俺って言って……指摘したらごまかしたんです。」

「ふうん……そっか。」

なんだか、英里菜さんはどことなく嬉しそうだ。

「あのね、未菜ちゃん。いいこと教えてあげようか？」

「……はい。」

わたしが答えると、英里菜さんはくすくす笑う。

「いい返事ね。」

自分が幼稚園児にでもなったような気分だった。

しばらくすると、英里菜さんは笑うのをやめて、一言だけ言った。

「もうすぐ、一番好きな人に会えるよ。」

「えっ？」

英里菜さんは、それ以上何も言わない。ただ、にこにこ立っている。

「一番大好きな人……。」

わたしがつぶやくと同時に、優しい風が吹いた。

本当の自分

家に帰ると、結菜が起きていた。

「おはよう、お姉ちゃん。こんな朝早く、どこ行ってたの？」

無邪気に聞く結菜。

「遥輝のところ。いつも、会う人がいるの。前に話した男の子と、もう一人女の人。すごくきれいなんだよ。」

話してあげると、結菜は口をかたく結んだ。

やっぱり、まだ気を遣ってくれているのかと思うと、申し訳ない。

「今まで、気を遣わせてごめんね。」

ぽつりとつぶやいてみると、結菜は一瞬とまどい、それから首を振った。

「いいよ。お姉ちゃん、わたしは、気を遣わなすぎるぐらいだから、これは気にしないで。」

そんなことない。結菜は誰に対しても、人一倍気を遣っている。

今だって、わたしを傷つけないように、こんなに気を遣っているじゃない。

でも、それは言えなかった。

言ってしまったら、結菜の思いが無駄になってしまう気がしたのだ。

「そうだ、お姉ちゃん。ここの問題教えてくれない？」

結菜が、急に話題を変えた。

きつと、この話を続けるのが嫌だったのだろう。

そんな結菜を見て、わたしはまた後悔した。

友達には、明るくなったと言ってもらえた。

来輝のおかげ。英里菜さんのおかげ。

でも、まだこうやって、わたしのせいで気を遣っている人がいる。

……どうやったら、わたしは元の明るい、時雨 未菜に帰れるの？

こんな風に悩むとき、いつも遥輝はそばにいてくれて。

わたしの一番欲しい答えを出してくれて。

あんなに、あんなに、大好きだったのに……。

どうして、いなくなっちゃったの？

「……お姉ちゃん？」

結菜の声で、我に返った。

「……泣いてる？」

うつすら赤くなった目を見られて、わたしは力いっぱい目をつぶった。

そして、開いた目を細めて、にこっと笑った。

「大丈夫、泣いてないよ。」

……ああ、まただ。

また、こうやって、自分を暗闇の中におとしいれていく。

来輝と英里菜さんに差し伸べてもらった手に、すがりつきたいけど、どうしても、どこかで強がってしまう自分がいる。

妹相手に、涙を見せられない。

そんな、変なプライドが、本当のわたしを押し殺す。

……本当に、どうしたらいいの？

本当の自分（後書き）

思い描いていた設計図から、かなりずれて行動する未来。
うまくラストに行けるかな？

会いたい人

その日の夕方。

迷ったわたしは、やっぱり事故現場に向かった。

朝行つて英里菜さんに会う。夕方行つて、来輝に会う。というのが、わたしの中で習慣になりつつあった。

「来輝！」

来輝の姿を見つけてかけよっていくと、一瞬来輝が驚いた顔をした。そして、つぶやくように言われた。

「……………ああ、未菜か。」

「ああ、つて何よ！」

「いや、ごめんごめん。他の人かと思つたからさ。」

「他の人？」

「うん……………」

来輝がなかなか話してくれないので、少しじれつたかったが、わたしだって遥輝の事を聞かれたら、こんな風にだまりこんでしまうはずなので、話してくれるのを待った。

「……………未菜？」

「何？」

「未菜は遥輝の事、一番大切な人だと思つてた？」

「えっ…………？」

いきなりの質問にとまどつたわたしを、来輝はのぞきこむように見つめる。

「うん……………」というか今もまだ好きだし、大切な存在。遥輝がいなくなったなんて、まだ信じられてないぐらいだし。」

言葉を選びながら、慎重に話していくと、来輝は、目を細めて笑った。

「そりゃそうだね、遥輝はまだいなくなつてないし。」

「……………は？」

わたしが首をかしげると、来輝はにこにこしてわたしの手をつかんだ。

その時、わたしは思わず「あっ！」と叫んでしまいそうになった。来輝の表情が、今まで以上に遥輝にそっくりだったのだ。

目をみはって立ちすくむわたしに、来輝は手をはなして言った。

しかしその声は、今までとは少し違う。

強く見えて、ちよつとでも刺激を与えたら、すぐに悲しみがこぼれ出してしまうような、そんな声。

「僕にも、大好きな彼女がいたんだ。頭はそんなによくないし、運動音痴だけど、すごく優しくて、かわいかった。本当に、大好きだった。」

「来……」

「でも。」

わたしは「来輝」と言おうとしたが、それは遮られてしまった。

「病気で、いなくなっちゃったんだ。それをきっかけに、僕は学校に行けなくなった。彼女とは、学校が一緒だったから、いろいろあつてね。」

「……」

もう何も言えなかった。来輝とわたしが、似ている境遇にいることを知って、下手な口出しができなかったのだ。

恋人の事が好きだったのに、いろんなことがあって、わたしは彼氏を、来輝は彼女を失った。

その悲しみは、本人じゃないとわからない。

いくら状況が似ていたって、来輝の悲しみは来輝にしか、わたしの悲しみはわたしにしかわからないはずだから。

来輝の声は、その話題を終えてから、少し明るくなった。

「そこで英里菜さんに会って、いろいろ教えてもらったんだ。それで、僕はもうすぐ一番大切だった人に会えるみたいなんだ。」

わたしも英里菜さんに言われた言葉。
きつとそれは……。

「遥輝……だよな？」

「さあ、どうだろうね？」

意地悪な目と、口の端をきゅっとあげた笑い方。見れば見るほど、思い出してしまう。

あの笑顔と、お日様のようないい香り。

「未菜」と呼んでくれる愛しい声。

今すぐにでも、会いにいきたい。

わたしの、一番大切な人。

遥輝、あなたに会いたいです。

明け方の訪問者

その日の夜中。

なぜか目が覚めてしまい、考えた末、ベッドから起き上がった。

隣には、すやすやと寝息をたてて眠る結菜。

わたしは、その頭をそつとなでてから、リビングにおりていった。

電気をつけると、結菜が洗ってくれた食器が、きれいに重ねてあるのが見えた。

本当になんでもできる妹だ、と感心してしまう。

両親共働きで、一時は結菜と二人なんて生活できるのか、と真剣に悩んだが、もともとわたしと違ってしっかり者の結菜は、逆にわたしを助けるぐらいに家事をこなし、生活をしている。

冷蔵庫から、ミネラルウォーターを取り出して飲みほし、コップをきれいに洗って、結菜が洗ってくれた食器のそばにおいておく。

そうしている間にも、目はどんどんさえてしまい、もう二度寝はできないぐらいになった。

どうせ明日も休みだし、と薄い毛布をひざの上に掛け、ぼんやりと窓の外の夜空を眺めていると、遥輝とデートしたあの時のことを思い出しそうになった。

（確かあの時は……）

記憶をたどろうとしたら、いきなりプツツと思考が途切れた。

控えめな玄関チャイムの音が鳴って、わたしは気が付いた。

どうやら、遥輝の事を考えている途中で、まぶたがくっついてしまったらしい。

二度寝はできないなんて思っていたが、気のせいだったようだ。

窓の外を見ると、空はもう白んできていた。

それにしても、一体誰だろう。

一応モニターで確認してみると、そこに立っていたのは、驚きの人

物だった。

「英里菜さん……どうしてここが？」

美人で、幻想的な雰囲気その女性は、まぎれもなく英里菜さんだ。モニター越しに、英里菜さんがほほ笑む。

「朝早くにごめんなさい。少し話をしたいんだけど、お家出てこれる？ 今日のは冷えるし、飲み物でも飲みつつ。大したものじゃないけど、わたし、ごちそうするから。」

突然やってきた英里菜さんに驚きつつも、わたしはやんわりと断る。「すみません、行きたいのはやまやまなんですが、まだ朝の五時ですし……わたしには妹もいますので、やっぱり一人で残すのは不安で……。」

出かけたくないわけではなかったが、結菜の事を考えると、どうしても行くとは言えなかった。

そのことを伝えると、英里菜さんはちよつと考えてから提案した。

「それなら、また来るわ。」

「また来る……って？」

「迷惑でしょうから、ここで待っているわけにはいかないもの。適当に時間つぶしてから、また来る。どうしても、未菜ちゃんと来輝君には伝えなくてはいけないことがあるの。先に、来輝君に伝えてくるわ。」

ウインクする英里菜さん。とても大人とは思えないような、かわいらしいしぐさ。

「そうですか。では、待っています……でも、どうしてもって？」

わたしの問いかけに、英里菜さんが首をすくめる。

「ごめんなさい、話の順序がばらばらになっちゃったわ。とにかく、ゆつくり二人に話さなくてはいけない事があるの。朝に、今日未菜ちゃんたちに伝えることを考えながら散歩していたら、偶然未菜ちゃんの家を見つけて……思わずインターホン押しちゃった。ご迷惑おかけしました。」

深々とお辞儀をされ、わたしは恐縮してしまった。

「妹が起きたらご連絡します。英里菜さんは携帯お持ちですか？」

「ええ。未菜ちゃんは？」

「ちよつと待つてください、今持ってきます……。」

わたしはいったん家の中に入り、ケータイをつかんで持ってきた。

「ずいぶん可愛い水色ね。」

「英里菜さんのケータイも、白でシンプルで大人っぽいですよ。」

褒めあいみたいになつてしまい、お互いちよつと照れていたら、英里菜さんが先にケータイを差し出してきた。

「連絡先送っていい？」

「あ、了解です。」

そうしてわたしたちは、無事に連絡先を交換しあつた。

「じゃあ、またね。」

「はい、またあとで。」

英里菜さんの姿を見送りながら、わたしはこれから伝えられることを想像して、ときどきしていた。

明け方の訪問者（後書き）

おはようございます、奏音です。

アイリスも、いよいよクライマックスに近づいています。
最後までお読みいただけるとうれしいです。

明日の朝に

結菜が起きてから、さっそく英里菜さんに電話したわたしは、誘われて入ったおなじみのファストフード店のハンバーガーを食べながら、英里菜さんの話を聞いていた。

「未菜ちゃん、朝からよく食べられるわね。しかも、こんなにたくさん。」

コーヒーだけ飲んでいる英里菜さんが感心したように言う。

「これぐらい食べられますよ。遥輝がいたときなんか、普通にこれ以上のもの食べていましたから。」

「デート？」

遠慮がちな英里菜さんの問いに、

「ええ、まあ……。」

恥ずかしくてあいまいに答える。

わたしも遥輝も、忙しくて時間が取れないときや、二人で過ごしていてそのまま夜を明かしてしまった時などは、このハンバーガーを食べに行ったり、コンビニでいくつもパンを買って食べたりしていたので、これぐらいの量はなんでもない。

もっとも、遥輝がいなくなっただけからはこんなに食べたのは久しぶりだけ。

「そういえば、英里菜さん。お話ってなんですか？」

もぐもぐとハンバーガーを食べ続けるわたしに、英里菜さんは一枚の紙を渡してきた。

「……なんですか？」

テーブルの上に食べかけのハンバーガーを置いて、その紙をながめる。

『未菜』とだけ書かれたその紙。しかし、その筆跡は、会えるはずのない、わたしの大好きな人のもの。

「これは……。」

英里菜さんは、言葉をなくしたわたしを見つめて、ゆっくりと口を開いた。

「明日、絶対に朝いつもの場所に来て。そうしたら……未菜ちゃんが一番大好きな人に会えるはず。」

「朝、ですか？」

「そう。来輝君とわたしと未菜ちゃん。三人であそこにいれば、きっと会える。お互いが会いたい、大好きな人に。」

この間まで、「もうすぐ会える」と言っていた大好きな人が、今いよいよ「明日会える」ところまでせまっている。

「わたしと来輝はわかります。でも、英里菜さんの会いたい人って？」

紙と引き換えにハンバーガーを持ち上げ、最後の一口を口に入れる。その動作を見ながら、英里菜さんがにこつと笑った。

「わたしは、来輝君のためにいなくてはならないの。わたしの大好きな人は、生きてるから……一応。」

最後の方、小さくつぶやいた「一応」の言葉が気になったが、深くは追及しなかった。

明日になれば、きっとすべてがわかる。

包み紙をくしゃつと丸めて、わたしは立ち上がった。

明日の朝に（後書き）

一章はもうすぐ終わります。楽しみにしててください

幻想の空間

そしていよいよ翌日。

「英里菜さん、来輝！」

わたしは、事故現場に走って駆け付けた。

そこには、遥輝の格好をした来輝と、結菜ぐらいの年齢の中で流行っている服装をした、英里菜さん。

「どうしたんですか、その格好？」

「これを着なくちゃ、大好きな人に会わせるって感じがしないじゃない。」

可愛く笑う英里菜さん。見た目が若いので、服がとても似合っている。

「オシャレですね。」

「これは、英里香の趣味だから当然だよ。」

来輝がくすくすと笑う。

「英里香って？」

わたしが聞くと、来輝ははっと口をつぐんで、急に話題を変えた。

「それより未菜も、結構オシャレしたんだね。」

「あっ、気づいた？」

聞かれて、わたしはうれしくなった。

「せっかく会うから、キレイな自分でいたいんだ。それでも悩んだんだからね、わたし。」

「遥輝が好きそうな服装だね。」

来輝の言葉に、わたしは問いをぶつけた。

「なんで、遥輝の好みまで知ってるの？」

すると来輝は、こぶしを握り締めて笑顔になった。

「……全部、もうすぐわかるよ。」

「未菜ちゃん、来輝君、始まるよ。」

英里菜さんが声をあげた。それに反応して、わたしたちは黙り込む。

「二人とも、しばらく目を閉じていて。」

そのまま、言われたとおりに行動する。

「未菜ちゃん。あなたが会いたい一番大好きな人を思い浮かべながら、ネットレスを握って。」

わたしが会いたい、大好きな人。

わたしはすぐさま、遥輝を思い浮かべた。

いつも、笑って「未菜」と呼んでくれた遥輝。

ケンカして泣いてしまったわたしを、困ったような顔でながめていた遥輝。

わたしに何か悲しいことがあると、抱きしめてなぐさめてくれた遥輝。

すべてが、愛しい大切な思い出。

会いたい、会いたい、会いたい……。

「成功だ……。」

どこかから、誰かの声がした。

そして、次の瞬間。

わたしの周囲が、まばゆい光に包まれた。

サヨナラ……

目をあけると、周りにはゆらゆら揺れるアイリスだけが、どこまでも広がっていた。

その花を目で追っていくと、遠くの方から懐かしい声がした。

「未菜ー、未菜ー！」

間違えるはずのない、低めの優しい声。

遥輝だ。

遥輝は、ゆつくりと歩きながらこっちへ来ていた。

わたしとの距離が近づくにつれて、整った笑顔が鮮明に見えてきた。そして彼は、わたしの目の前に姿勢よく立った。

「ハル……キ？」

「久しぶり、未菜。」

あのあたたかい、お日様のようなほほえみ。それを見るだけで、遥輝がここにいるんだと不思議な感覚になった。

「元気だった？」

「遥輝がないのに、元気なわけないでしょ。すっごく落ち込んだんだからね！」

今にも文句をたらたら言いそうなたたしの勢いに、遥輝が一步あとずさる。

「ごめん……俺も、最後に一目未菜に会いたかったんだ……。」

その言葉がうれしくて、わたしは思わず甘えるような声を出した。

「……でも、こうして会えたじゃない。」

気分を明るくするように言うと、遥輝が少し眉を下げた。

「そう……だな。」

そんなにさびしそうに笑わないで……。

最後なんて、言わないで……。

「遥輝は、どうしてここに？」

「ああ、来輝の体を借りていたんだ。その事については、あとであ

のお姉さんから、詳しい話があるんじゃないか？」

遥輝が英里菜さんの事を「お姉さん」というのがおもしろくて、わたしはぷつと吹きだした。

「何で笑ってるんだよ。」

むくれる遥輝が可愛くて、わたしはまた笑った。

この暗い気持ちを吹き飛ばすぐらい、せいでいい。

そしてひとしきり笑い終わると、わたしは深呼吸をして前を見た。すると、目の前でむくれている遥輝と、来輝の雰囲気为重なった気がした。その瞬間、さっき遥輝が言っていたことを思い出し、納得した。

「来輝の体に遥輝が入っていたから、あんなに似てたのね。来輝と遥輝。」

「というより、もともと兄弟なんだから、似ていて当然だろ？」

「えっ、兄弟なの！？」

「あれ……知らなかった？」

意外そうな顔を見せる遥輝。しかしそれも、わたしの胸元にあるペンダントを見てから変わった。

「……それ、つけてくれているんだ。」

「ああ、これ。遥輝が……くれたから。」

形見だから、と言おうとしてやめた。

目の前にいるのは、たとえ来輝の体だとしても、遥輝なんだから。

「未菜の花だからね、アイリスは。」

「どういう意味？」

わたしが、ペンダントを手で包み込みながら聞くと、遥輝はにっこりした。その、来輝によく似た笑顔で。

「よく考えれば、わかるはずだよ。未菜は、俺の彼女なんだから。」

「……そっか。」

ほほ笑み返すと、遥輝はわたしにいつもの優しいキスをして、抱きしめてくれた。

「未菜……最後に一つ。」

「うん、何？」

「幸せな結婚をして、子供を産んで、これ以上ないくらい幸せな家庭をつくっていった。俺はいつまでも、未菜を見守るから。俺は、どんなことがあっても、絶対に未菜を忘れないから。だから。」

「……俺を忘れて。」

遥輝の言葉が、切なすぎて泣きそうになった。

「ごめん。でも、未菜が俺の事忘れてくれないと、俺は一生後悔するから……。俺にしばらくられないで、いっぱい恋して、俺なんかよりもっといいヤツ見つけてほしいんだよ。」

「遥輝、わたしは遥輝の事忘れるなんて嫌だよ！」

わたしは、精一杯叫んだ。でも遥輝は、いつもと違って簡単に折れなかった。

「どうしても……お願い。」

なんで……遥輝の方こそ、泣きそうになっているのに。こうするしか、方法はないの？

「未菜……。」

わたしの瞳から、涙がこぼれた。それに続けて、遥輝の瞳からも雫が落ちる。

それを見て、ついにわたしは、大きな決心をした。

「……わかった。」

心から、遥輝の願いにこたえたいと思った。

遥輝は泣いてまで、わたしの幸せを願ってくれている。

わたしだって、遥輝に一生後悔させてしまうような事はしたくない。だから……この道を選んだんだ。

「でもね、これだけは言わせて。」

わたしは、遥輝にくっついた。

「忘れたくても、忘れられない事ってあるの。簡単に忘れられない

思い出……遥輝と過ごした日々を全部忘れる事、わたしには無理かもしれない。だから、ゆつくり、ゆつくり頑張るから。遥輝も、生まれ変わって幸せになってね？ 何年先かにまた会ったとき、惚れ直しちゃうような人になってお互いを見て、今度こそは二人で幸せになろうね？」

「……ああ。」

遥輝がゆつくりうなずいた。そしてもう一度、さっきより強く強く、わたしを抱きしめてくれた。

「未菜……大好き。」

「うん、わたしも……。」

「サヨナラ……未菜。」

「……っ！ サヨナラ……。」

そういつて、遥輝 来輝の体は、フツと力が抜けたように、その場にしゃがみこんだ。

サヨナラ……（後書き）

綾未玲 奏音です

あと、本当にもう少して一章は完結します。

ここまで読んで下さった皆様、本当にありがとうございます……！

不思議な体験

急に、周りの光が薄れた。辺りは、遥輝に会う前と同じ事故現場の景色。

その途端、座りこんでいた遥輝がぼやっとする目を開けた。でもその、微妙に違う雰囲気ですぐに気付いた。

「来輝……でしょ？」

ぱつちりと目覚めた来輝が、立ち上がる。

「その通りだよ。」

わたしは今までの来輝と目の前にいる来輝とは、少し違った印象をもった。

今までの来輝は、遥輝と重なるような錯覚に陥るほど遥輝に似ていた。しかし今目の前にいる来輝は、もっと初めに会った時のように幼い感じがした。

一番最初、来輝と会った時と、だんだん雰囲気違っていったことに、今になってやっと気づいた。

「どう？ ……会えた？」

来輝が言いたいことは、すぐにわかった。

「会えたよ！」

元気に言ってみせると、来輝はやつと笑顔になった。

「じゃあ、英里菜さんの所に行こうか。」

「あ、待つて！」

わたしは、今にも歩いていきそうな来輝を呼び止めた。

「その……余計なお世話かもしれないけど。」

もじもじと黙り込むわたしを、来輝がじつとのぞきこむ。

「来輝は……会えたの？」

ちろつと来輝に視線を送ると、幼い笑顔でほほ笑む来輝。

「会えたよ。大好きな、大好きな人にね。」

それを聞いて、わたしはなぜかほっとした。

「よかった……。」

「英里菜さんに報告しなくちゃな。とにかく、話はそれからだ。」

「そうだね。」

わたしたちは、どちらからともなく小走りで英里菜さんのもとへ駆け出した。

「二人とも、会えてよかったわね。」

大人のほほえみを送ってくる英里菜さん。

ここは英里菜さんに、あらかじめ待ち合わせ場所として指定されていた、オシャレなカフェ。

「はい、とってもよかったです。」

「僕も、幸せになりました。」

わたしと来輝は、口をそろえて英里菜さんにお礼を言った。

「素敵なものを見せていただいて、ありがとうございます。」

「いえいえ。」

口元を隠して笑う英里菜さん。

その表情は、来輝とは逆に、今までよりも大人びている。

「あの……そろそろ、この不思議な現象について話していただいけませんか？」

遠慮がちに聞くと、英里菜さんは、

「ああ、そうだったわね。」

と、アイステイーをストローで吸いながら言った。

「その前に一つだけ、忠告。」

コップの中でとけかけた氷が、カランと音をたてて他の氷とぶつかる。

「今体験したこの事を、決してほかの人に言うてはいけないわ。それは、遥輝君や英里香が言っていた約束だから、守るって約束して？」

その言葉に、わたしたちはすぐうなずいた。

遥輝や、来輝の大事な人なのであろう、英里香さんという人が言っ

ていたのなら、それは守らなくてはならない決まり事だ。
わたしたちの反応に、英里菜さんがこくんとうなずいた。
「……では、話しますか。」

ネックレスの秘密

「未菜ちゃん、遥輝君から何か聞いた？」

「はい。」

その質問を受け、遥輝が来輝の体を借りて、わたしに会いに来てくれたと聞いた事を話した。

「そっか……方法だけ教えてくれたのね。」

納得したように、ふんふんとうなずく英里菜さん。その横では、来輝がそんな英里菜さんをじっと見つめている。

「うん……わかった。それならわたしたちは、もう少し詳しく話そうかな。」

英里菜さんが、自分の近くに置いてあったコップを遠ざける。

「あのね……。」

「わたしたちに不思議なものが見えるようになったのは、二つの不幸をいっぺんに経験してからだった。

未菜ちゃんが遥輝君をなくしたように、わたしと来輝君も、大事な人を失っているの。」

「その、大事な人っていうのは……。」

「谷川^{たにかわ} 英里香^{えりか}。英里菜さんの妹で、僕の彼女だったんだ。」

来輝のはつきりとした言葉に、一瞬遠い目になる英里菜さん。何を考えているのか、その表情から読み取ることはできない。

「それから、来輝君はお兄さん　遥輝君までをなくし、わたしは彼氏とのデートで事故にあった。彼氏はその事故のショックで話せなくなったのに、わたしだけ助かったの……彼氏のお兄さんも、その奥さんも、自分を責めないでって何度も言ってくれたんだけど……。どうしても、彼氏はわたしをかばったから、こんな風に話せなくなっただけじゃないか……って考えちゃって。気が付いたら、わたしは自分で命を絶とうとしてしまっていたの。」

急に、言葉をつまらせる。こんなに切なそうな英里菜さんを、初めて見た。

「それを、彼氏のお兄さん達が気づいて、止めてくれた。だから、またわたしの命が助かった。それがつらくて仕方なかった、そんな時なの。英里香の声が、頭の中に響くように聞こえてきた。それからすぐに、来輝君は、不思議な事をよく知っていたから、もしかしたら、来輝君のところにも、英里香の声が聞こえているんじゃないかと思って、メールしてみたの。でも……。」

「僕の頭の中に聞こえていたのは、英里香の声じゃなくて、遥輝の声。もう二度と会えなくなってしまった人がもう一度だけこの世に来たんだ、って英里菜さんの話を聞いて、直感した。」

過去を思い出すように、一つ一つ確かめるように話していく英里菜さん。

「未菜ちゃんに、初めて会った次の日から。いよいよ、英里香とわたしは一つの体に二つの人格が宿っているような感じになった。それまでは少し声が聞こえるぐらいだったのが、会話ができるぐらい鮮明な英里香の心が出てきた。」

「僕の方も、未菜に会ってから遥輝が目覚めたみたいになった。」
来輝が追加情報を付け足してきた。

「でもそれは、未菜ちゃんになにか特別な力があるわけではないの。たぶん、その遥輝君がくれたネックレスが、重要なんだと思う。それがなきゃ、わたしたちは出会えなかった。」

「……どういう意味ですか？」

わたしは、ごくりとつばを飲み込んだ。

英里菜さんの、ピンク色の唇が動く。

「アイリスの花言葉、知ってる？」

脳内で、遥輝が言っていた言葉がフラッシュバックした。

未菜の花だからね、アイリスは。

あの時に言いたかったのは、今英里菜さんが言おうとしている事なの？

「……未菜。これ、遥輝の部屋に落ちてた。」

来輝が、バッグからきれいな四角に折りたたまれた紙を取り出した。

「これって……！」

わたしは、それを広げてみて、息をのんだ。

そこにはアイリスの花についてのいろいろな事が書かれていたのだ。

「ほら、ここ見て。」

来輝が指し示した場所には、「花言葉：恋のメッセージ」というピンクの文字があった。

「そのアイリスのネックレスが、恋のメッセージを伝えるために、遥輝君や英里香の魂を呼び出し、わたしたちを出会わせた。そして、あの幻想的な空間をつくりだしたの。」

英里菜さんが、静かに語る。

「未菜……もう一つあるよ。」

「えっ？」

「未菜の誕生日は？」

来輝が、もういないはずの遥輝そっくりな笑顔で紙の上を指した。

「あっ！」

誕生日 4月17日

「これ……わたしの誕生日だ。」

「そうだよ。遥輝は……未菜の花であるアイリスを、誕生日に贈ろうとしていたんだよ。」

「……もしかして。」

「未菜。遥輝が事故にあった日は、いつ？」

あの日。

わたしの頭の中で、時間が高速で逆戻りする。

朝起きて、遥輝の電話をうけて待っている間に、結菜が。

「お姉ちゃん、今日は4月17日だよ。」

そう教えてくれたつけ。

あの時、どうして気づかなかったのだろう。

遥輝が来てくれるのがうれしくて、誕生日の事を忘れていた……。

「4月、17日……。」

「そうだよ。それは……未菜へのバースデープレゼントなんだよ。」
こらえていた涙が 手に持っていたネックレスの上に落ちて行った。

「遥輝……遥輝……どうして……。」

「未菜……。」

「いなくならないで……わたしは……あなたの事を忘れるなんてできないよ……。」

一つこぼれた涙は、そのまま頬を伝って落ちていく。

「やっぱり……やっぱり無理だよ……。」

「未菜ちゃん、もう泣かないで。」

目の前に座っていた英里菜さんが、あたたかい声で言ってくれる。

「遥輝君も、未菜ちゃんも、お互いの事が本当に好きだったんだね……。」

「わたしにはできない……大好きな人を忘れるなんて、できません……。」

わたしの声が、途切れ途切れになった。

「わ……すれ……られないよ……遥輝……大好きでいた……いよ……。」

「未菜、それでいいよ。」

来輝がわたしの隣に座った。

「好きなら、好きでいいよ。いつか自分の気持ちの整理ができるまで、きつと遥輝は待ってくれるよ。」

「らい……き。」

「未菜。」

遥輝と同じ温もりで抱きしめてくれた。

「遥輝は……最後まで、未菜の事を想っていたから。」

その言葉が、抱いてくれる手が、すべてが遥輝にそっくりで、優しすぎて……。

わたしは、来輝の胸の中で泣いた。

遥輝、ありがとう。
わたしは本当に、幸せだよ。

ネックレスの秘密（後書き）

ラスト一話ですっ！！

ENDING

遥輝がいなくなった……。

そのことをわたしは、今になってやっと理解できたような気がする。もちろん、わかったからと言って、簡単に忘れるなんてできないし、まだ心の整理はできていない。でも、それでも。

あの日遥輝がくれる予定だったアイリスのネックレスが、恋のメッセージを伝えるために、わたしたちをもう一度会わせてくれたのなら。

わたし達三人を、出会わせてくれたのなら。

わたしは、そのメッセージをちゃんと受け取る。

大好きな遥輝がくれた、大好きなネックレス。

それはいつになっても、遥輝との想い出を語るものだから。忘れられない出会い。

大切な人を永遠に失った悲しみ。

そういうものも全部ふくめて、現実を受け止める。

わたしは、もう暗闇から目をそむけない。

その先の光にたどりついていけるまで、自分の足で歩いていきます。

遥輝、大好きです。

そして、さようなら。

ENDING (後書き)

一章〱アイリス〱完結しました!!

構成を考えはじめてから、約一年半。

アイリスがこういう風に仕上がって、本当に幸せです。

これから、二章、三章も書いていきますので、もしよろしかったら見てみてください

本当に、本当にここまで読んでいただきありがとうございます
m)。?。?(m

彼女の死（前書き）

第二章、スタートです

彼女の死

ピーー

「5月17日、午後1時8分、ご臨終です。」

お医者さんが、手を合わせてドアから出て行った。

今、この世から旅立って行ったのは、僕の彼女、谷川^{たにかわ} 英里香^{えりか}。

残された英里香の家族と、僕　庄野　来輝は、目の前にいる彼女にとりすがった。

「英里香……。」

もう話さないのはわかっていたが、それでも話しかけるのをやめられなかった。

理屈では、いつものように英里香が笑ったり、怒ったり、泣いたり、話したりする事はない、と納得していたのに、心の中で、「もしかしたら、死んだなんて、英里香が考えた冗談なのかもしれない。」なんて考えてしまう。

バカバカしいのもわかっていたけど、愛しい人の死を目の当たりにして、冷静でいられるほど僕はすっかりしていない。

「英里香がいなくなるなんて、嫌だよ……！　お願いだから目を覚ましてくれよ！　死ぬなよ、英里香！」

英里香の両親が、ハンカチを目に当てている。

明日、かなり目が腫れるだろうところまで、僕は泣きじゃくった。

生気を失った真っ白い顔で、ベッドの上に横たわる英里香。

「う……うわ……。」

あまりにも涙を流す僕を見かねて、英里香の姉である英里菜さんが、僕を病室から廊下へ連れ出し、座らせてくれた。

「来輝君……こんなに大事に思われているなんて、英里香は幸せだったよ……。だから、もう泣かないで……。」

少し遅れて外に出てきていた英里香のお母さんが、僕の肩に手を置

いた。

「ヒツ……ヒツク……。」

英里香は、病気だった。

現在の医療でも完全に治す事は難しい、と言われている、難病にかかっていたのだ。

それでも英里香は、病気でついに倒れるまで、誰にもその事を打ち明けなかった。

目を覚ましたときの第一声は、「病気になっちゃって、ごめんなさい……。」だったぐらいだ。

もともと人に気遣い、優しい英里香。しかし学校ではその優しさが仇となり、けんかの仲裁をしても、「あんた、どっちについてるの!？」とみんなに言われ、若干いじめられてもいた。

それでもいつも優しく可愛らしい英里香に心をひかれ、僕は告白してOKをもらえたのだ。

その直後、病気が発覚して、今までずっと闘病してきたのだが、今日、その生活も幕を閉じた。

「えりかぁ……どうしてだよ……。」「

悔しい。英里香を病魔から守りきる事ができなかった自分が、腹立たしい。

「英里菜、わたしたち先生に呼ばれているから……。」「

「わかった。」「

頭上で、英里菜さんとお母さんが話す声が聞こえる。

「じゃあ来輝君、何かあったら英里菜に言ってね。」「

そういつて、お母さんはその場を離れた。

英里菜さんは、泣き続ける僕の背中をずっとさすっていた。

そして僕は、気が付かないうちに眠っていた。

彼女の死（後書き）

こんにちは、綾未玲 奏音 です。

最初から、かなり重い雰囲気になってしまいましたが、いよいよ第二章「スターチス」がはじまりました。

読んでいただけたらわかる通り、スターチスは来輝目線です。

これからの物語、楽しんでいただけたら幸いです。

受け止めたくない

目が覚めると、病院のソファの上だった。

「……寒っ。」

4月とはいえ、まだ肌寒い。

座りなおして身体をこすっていると、

「来輝君、起きた？」

なんて言いながら、英里菜さんが近づいてきた。

「寒いでしょう？ これでも飲んで。」

渡してくれたのは、温かいココア。

まだ英里香が死んだという現実を受け入れられない、ぼやつとした意識の中、

「すみません、いただきます。」

僕はそれを受け取った。

一口飲むと、じんわりとあたたかさが染みていく。

口内に優しい甘みが広がり、ちょっとだけ気持ちをリラックスさせてくれる。

「……そういえば、今何時ですか？」

「4時よ。ずいぶん眠っていたわね。」

英里菜さんが、僕の隣に座る。

「……英里香がいない世界が、3時間もたったんですね。」

僕の言葉に、英里菜さんが大きな瞳をふせる。

「……そうね……。」

気まずい沈黙が流れ、僕はココアを飲み進めた。

そしてその缶が、もう空になるかと思われた時、英里菜さんが重い口を開いた。

「大切な人を失うって、本当につらいわね……まだ、受け止められないわ……。」

そういう英里菜さんの額には、ガラスで切ったような傷が残ってい

る。

英里菜さんは、今年に入って何日かしたころ、彼氏さんとドライブ中に、事故にあった。

詳しいことは聞いていないが、二人とも命は無事だったものの、彼氏はショックで話せなくなったとか……。

そのことも含めて、英里菜さんは悲しんでいるのだろう。

そして僕も。

「……受け止めたくありませんよ。いつぺんに二人も大切な人を失うなんて……。」

僕が失った、二人の大切な人。

一人は英里香。もう一人は、僕の兄、遥輝だ。

今日のような、どんよりした曇り空の日。

彼女の家に、誕生日プレゼントを届けに行った遥輝は、途中で事故にあい、そのまま帰らぬ人となってしまった。

「……僕が、代わってあげたかった。」

僕がつぶやくと、英里菜さんもため息をついた。

「……本当よね……。」

窓の外では、雲が大粒の涙を流すように、雨が降っていた。

僕はそれを見ながら、明日は嵐になるかもな、などとぼんやり考えていた。

嵐と闇

英里香のお母さんが、僕と英里菜さんのところに帰ってきてから数時間後、予想通りの、強い雨が降ってきた。

最初は電車で帰ろうと思っていたのだが、かぜをひいたら大変、という理由で、英里香のお母さんと英里菜さんが、家まで車で送ってくれた。

「来輝君……着いたわ。」

ただ、ついこの前、車で交通事故にあつた英里菜さんは、トラウマのためか、どことなく顔色が悪い。

「ありがとうございます。」

深々とおじぎをして、車を見送る。

完全に車が見えなくなつてから、一人になつた僕は、ドアを開けて家に入った。

「ただいま。」

声をかけても、家には、誰もいない。

いつも家にいてくれた兄は亡くなり、それから唯一の心の支えだつた彼女は、今日短い生涯を終えた。

この家でたつた一人の僕を襲ってくるのは、暗闇と、孤独感。気が付くと、自然と二人の名前を呼んでいた。

「……遥輝……英里香……。」

どうして……どうしてこんなことに。

「神様……どうして……。」

天井に向かってつぶやいてから、気が付いた。

こんな風に聞いたつて、遥輝や英里香は戻つてこない。

「英里香の病気を治らせて」「遥輝の意識を回復させて」

英里香が病気だとわかった時も、遥輝が病院に運ばれた時も、何度も願った。何度も祈った。

でも、どちらもかなわなかった。

神様なんか……いるはずがない。

「なんで……僕はこんなにバカなんだろう。」

つぶやいた声が、闇の中に消えていく。

この家の廊下は、僕の人生のようだ。

先に光はまったく見えない。

足元を見たって、振り返ったって、待ち構えていたように広がる黒い世界。

絶望を感じていたその時、頭の中に、ぼんやりとした声が響いてきた。

「ら……ら……。」

しかし、言葉を聞き取ることも、自分の声なのか、他の誰かの声なのか、判別することもできない。

ただ、怖くはなかった。

それぐらい、その時の僕は何を考える余裕もなかったんだ。

僕は電気もつけず、力を抜いてその場に座り込んだ。

突然のメール

翌朝。

目が覚めると、案の定目が腫れていた。

「はぁ……………」

鏡で自分の顔を見ながら、自然とため息が出る。

母親に用意されたワイシャツを見ながら、

「学校行きたくねえな。」

一人で本音をもらした。

嫌でも、学校には行かなくてはいけない。

だけど、いざ行こうと制服に着替えただけで、足が震えるのだ。

「な、何だコレ……………」

英里香がいなくなったからなのだろうか。

学校に行くのを、体中が拒否しているような感覚。

やっぱり、英里香と二人だったから、僕たちはいじめに耐えられたんだ。

でも、その支えを失った今、僕は何にすればいいのだろうか？

「…………やめよう。」

あきらめた。

いくら学校へ行こうとしても、足が動かないのじゃ仕方がない。

（これは、真剣にどうするか考える必要があるな。）

とりあえず、今日は休もう。

そう思って、制服を脱いで丁寧にハンガーにかけ、もう一度布団に入ろうとした、その時。

『…………』

着信音が鳴って、一件のメールが届いた。

差出人は、英里香。

「…………え、英里香！？」

あわててケータイを開いたが…………実際の差出人は、英里香ではなく、

英里香のケータイを使って僕にメールを送ってきた、英里菜さんだった。

“おはよう。谷川 英里菜です。

来輝君、昨日はどうもありがとう。

英里香を見守ってくれて……本当に感謝するわ。

勝手に英里香のケータイを使ってしまうんだけど、びっくりさせたかしら？

もし来輝君さえよければ、アドレスをわたしのケータイに登録させてもらえない？

少し、お話があるの。

来輝君にも、関わるかもしれない話。

今度、聞いてくれないかな？”

？で締めくくられたメール。

僕はもちろん、それに答えた。

“おはようございます。

もちろん大丈夫ですよ。

お話というのは？”

あえて、英里香の事にはふれなかった。

しばらくすると、返信がきた。

しかし、今度の差出人のところには、英里菜さんのアドレスらしきものが入っていた。

“さっそく登録しちゃったわ。

一応書いておくけど、谷川 英里菜です。
これで、メールでの自己紹介は二回目ね。

さっそくだけど、本題に入るわ。

来輝君は、人は亡くなったらどうなると思う？。”

響く声

僕は、英里菜さんの質問に、衝撃を受けた。
しばらくの間、メールを打つ手までが止まってしまった。

人は亡くなったらどうなると思う？

どうして英里菜さんは、いきなりそんな事を聞いてきたんだろう。
考えるうち、僕の頭の中に、小さい頃に聞いたある物語がうかんできた。

《この世でいい行いをした人は、天使の待つ天国へのぼっていく。
この世で罪を犯した人は、悪魔の待つ地獄へ落とされる。》

罪を犯した天使と、いい行いをした悪魔の話。

《なら、いい行いをした悪魔は地獄へ落ちる？
罪を犯した天使は、天国へのぼる？》

この話を書いたのは、誰だったわけ……。
記憶をたどって、やっと思い出した。

この話の作者は……遥輝だ。

小さい頃、僕は一つ上の遥輝に、ずっとくっついていた。

その時の僕は、遥輝に絶対的な憧れがあり、何でも知っている遥輝がすごくかっこよく見えていたのだ。

実際、遥輝は、わからないことはすぐ調べ、悩み、考え、自分の答えを出して解決していくような人だった。

僕が「人は死んだらどこへ行くの？」と聞いた時にも、よく考えて

答えを出すために、自ら絵本を書いて、僕にわかりやすいように自分の考えを示してくれた。

その姿勢は、事故が起きる直前まで、ずっと。

僕は、あのあと遥輝の部屋で、一枚の紙を拾っていた。

花をモチーフにしたネックレスの写真が、一枚印刷してあり、その周りにネックレスの情報がいろいろ書いてある紙。

そこにあつた数字に、僕の目は吸い寄せられた。

「4月17日」まぎれもない、遥輝が事故にあつた日だ。

遥輝は、カレンダーにもその日に大きな赤丸をつけていたから、その日に何かをする予定だったのだろう、と、その時の僕は大きくもとめていなかったのだが。

僕はその後、最近になってその日が何の日なのか気づいていた。

その日は 遥輝の彼女だった、時雨 未菜さんの誕生日だ。

遥輝と同級生だから、僕より一つ年上。

一度だけ遥輝に見せてもらっていた写真からは、「大人っぽい」という印象を受けていた。

遥輝は、事故にあつた日、未菜さんの家に向かっていた。

その、誕生日プレゼントのネックレスを渡すために。

だけど、未菜さんの誕生日 幸せだったはずの日 は、一瞬の事故のせいで、遥輝の命日となってしまった。

今、未菜さんはどうしているのだろうか？

僕と同じように、心に穴があいたような喪失感を抱えながら生きていくのだろうか。

気が付くと僕はなぜか、会った事もない未菜さんに、妙な興味を抱いていた。

自分と同じような境遇にいて、同じ人を亡くした未菜さんに、会いたいような気がしたのだ。

そんな事を考えていると、突然また頭の中に誰かの声が響いてきた。それは昨日よりも、鮮明に。

「……ら、い。」

聞き覚えのある、僕が絶対的な信頼をおいていた人の声。

“人は亡くなったら……”

英里菜さんのメールの文章が、なぜか頭の中で繰り返しリピートされていった。

v o i c e (前書き)

かなり短いです。

voice

“ 来輝君。わたしの頭に、さっきから、英里香の声がずっと聞こえるの。”

やっぱり……。

そのメールを見て、今まで考えていた、僕の中で響く声の人物に、確信を持てた。

“ 僕もです。遥輝の声が、消えません”

遥輝……死んでしまったはずの、僕の兄。

僕は、遥輝。英里菜さんは、英里香。

いったい二人に、何が起きているのだろう。

ひたすら考え込む僕に、英里菜さんは、大人な様子のメールをくれた。

“ 二人に会うことはできないから、二人に関係の深い場所に、行ってみましょう。”

メールのやりとりは、それで終わった。

携帯を閉じた僕は、真っ先に遥輝と関係の深い場所を、思い浮かべていた。

遥輝の、事故現場だ。

だけど、ただ行くだけでは、意味がないかもしれない。

そのため、遥輝に関わりの深い「モノ」を持って行こうと考えた。

しかし考えてみても、肝心の「モノ」がわからない。

こういう時、兄弟は不便だ。

相手を嫌でもほぼ毎日見るから、印象がバラバラ。

いろいろな顔、いろいろな声、そのすべてを見てきたから、余計にわからない。

それは「遥輝」という、一人の人物を思い起こさせるだけだ。

「わかんねえよ……」

頭をかいた、その時。

「……イリ……」
また、声が響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7945p/>

アイリス

2011年12月30日23時46分発行